【特別寄稿】

近況報告

田村　照子

文化学園大学（名誉教授）

１．はじめに

50 年余にわたる文化学園大学での教員生活、その被服衛生学の最終講義を無事に終えたのが昨日のことのように感じられますが、あの日から早くも 8 年。お陰様であちこち痛いと言いつつ、絵を描いたり音楽を聴いたりして、人生の最終章を過ごしております。そんな折の執筆依頼に少し困惑しつつ、名誉会員としてお伝えすべき本部会の歴史については、2 年前の被服衛生部会創立 40 周年記念シンポジウム（佐藤真理子実行委員長）[1] で紹介させていただいたところですので、本稿では、家政学会にまつわる 2, 3 の思い出と、齢を重ねた今、感じ考えていることを記し、責を免れたいと思います。

２．「日本人の生活―50 年の軌跡と 21 世紀への展望」出版に携わって

被服衛生学部会の親学会、日本家政学会で、私は長らく理事、会長などいろいろな経験をさせていただきました。中でも創立 50 周年の記念出版「日本人の生活―50 年の軌跡と 21 世紀への展望―」については編集委員長として出版に携わり、戦後 50 年の歩みに目を向ける機会を得ることができました。20 世紀末に出版されたこの本の中では、戦争が日本人の生活に及ぼした傷の深さ、そこから回復してきた日本人の強靭な力、その後の高度成長期を振り返り、その先の情報社会がもたらす光と影を展望するところで終わっていました。その後 21 世紀に入り、さらに 4 半世紀を経た今日、想像以上の速さで私たちの生活環境・世界情勢が変化していることを実感しています。温故知新、ぜひ「日本人の生活」もご一読ください。

３．国際家政学会－生の生活を知る

日本家政学会も加盟している国際家政学会 (International Federation for Home Economics、IFHE) の大会には何回か参加させていただきました。1988 年米国ミネアポリスでの大会には研修中のカンザスから参加しましたし、1996 年タイのバンコク大会の折には、故登倉先生が現地の研究者との被服衛生学に関するミニシンポジウムをご準備くださり、私は当時取り組んでいた「乳児の腰部発汗サーマルマネキンの開発とおむつの蒸れ」について発表させていただきました。2000 年大会はアフリカ中部の国ガーナの首都アクラでの開催で、次の開催国である日本からは、そのバトンを受け取る立場から多くの役員が参加、その折の報告は学術の動向 [2] に報告させていただきました。アクラでのホームビジットで強く感じたことは、一般の人々の生活と大学教授宅で見たそれとの間にある余りにも大きな「貧富の差」でした。2004 年日本での京都大会では、大勢の海外、特に韓国や中国、台湾からの参加を得て充実したものとなりました。2008 年スイスのルツェルン大会は、IFHE 100 周年の記念大会ということで、日本からも大勢の会員が参加しましたね。このように海外での学会、特に IFHE ではホームビジットなどを通じて、各国の生の家庭生活を知ることができます。会員の皆様にはぜひ積極的に参加されることをお勧めします。

４．独国、英国での戦争との出会い

IFHE 大会の中で今も強烈に思い出すのは、1992 年ドイツのハノーバー大会と、その後回った旅でのことです。壁崩壊後間もない東西ベルリンの街では、両者の経済格差を実感。またドレスデンで

は､戦火を浴びて真っ黒になった教会に息をのみ、世界大戦の傷跡は広島のみならず世界中に深く残されていると感じました。またこの夏は、遠くヨーロッパまで来たのだからと欲張って、友人のいるデンマーク、卒業生の住むスウェーデンに立ち寄り、B&B を経営する同僚の住むケンブリッジまで足を延ばして 1 週間滞在。ここでは英国の大学の歴史と格調の高さに圧倒されると共に、ケム川でボートに打ち込む大学生に見とれたり、ロンドンの食生活のまずさに閉口したり、生のイギリスに触れることができました。それからさらに列車に乗って、英国中部の都市マンチェスターまで行った時のことです。マンチェスターの町はどんよりと暗く、海流の関係からか、夏というのにダウンジャケット姿の人々が行き交っていました。そして友人との再会を喜んだ市庁舎前広場、そこで見たものは、市庁舎の壁面にかけられた大きな横断幕の文字“No More Hiroshima”でした。日本から遠く離れた外国の地方都市、8 月初めだったこともあり、世界中で広島に思いを馳せる人がいたのでしょう。しかし、予想もしなかったこの光景に私は、世界は戦争に対する共通の思いで繋がっていると深い感動を覚えました。

５．私の生い立ちと戦争への思い

ここで余談ですが、私の生い立ちについて少し述べたいと思います。私の父は軍人で、私が 3 歳の終戦時は少将という立場にあったようです。この立場は微妙で、結局父は戦後長い期間巣鴨プリズンに収監され、私が物心つく頃には父親不在でした。母や姉兄を通して語られる父親像は「良きお父様」でしたが、社会的には「戦犯」の子であり、すべてを失った母の細腕ではすこぶる貧乏。ただ学校の先生を含む多くの大人たちには状況を理解していただけ、友達にもいじめられることがなかったのは幸いでした。そんなこともあり私の中には戦争に対する屈折した思いと、戦争だけは嫌だという強い思いが常にくすぶっているのです。

６．ノーモア被爆者

家政学とは離れますが、この春、日本で公開された映画「オッペンハイマー」を観ました。ここでは広島の惨状というより、原爆の開発を主導した科学者の栄光と苦悩が中心として描かれ、科学の進歩、その利用の仕方がもたらす光と影を私たちに問いかけるものでした。また、この秋には、2024 年のノーベル平和賞が日本の「日本被団協」に授与されるとの報道が飛び込みました。広島、長崎の原爆生存者による長い間の草の根運動が評価された瞬間で、この運動が、世界中の人々のものとして認められたことを嬉しく受け止めました。とはいえ、ウクライナ、中東での戦争は今も続いています。オッペンハイマーの論評にも、また最近の原発に対する世論の中にも見え隠れするように、今後も拡大する電力需要と低炭素化社会に向けた必要条件としての原子力利用の全否定はそうたやすくないようです。

被服衛生学は被服という小さな局面からではありますが、人類の健康・福祉と世界の平和を願うという点ではこれらの問題と共通の地平に立っています。衣服による熱中症対策の研究はまた、地球温暖化、原子力発電という課題とも直に繋がっているのですから。

ただ、今いえることは、どんな選択があるにせよ、少なくとも、戦争に対する“No”の思いだけは譲れないということでしょうか。楽しい思い出とともに、そんなことを考えている今日この頃です。

引用文献

1) 佐藤真理子；第 40 回被服衛生学セミナー報告、被服衛生学部会誌 42、13、2023
2) 田村照子：第 20 回国際家政学会京都会議への始動第 19 回ガーナ大会参加報告：学術の動向　6－12，2001

＜連絡先＞
田村　照子
（文化学園大学　名誉教授）